

京都府京田辺市

山崎3号墳発掘調査報告書

—個人住宅建設に伴う発掘調査—

2023

京 田 辺 市

山崎 3 号墳発掘調査報告書

京 田 辺 市

巻頭図版



山崎3号墳出土管玉



山崎3号墳周辺（西から 手前に調査地、右奥に木津川を望む）

序

京田辺市は、東に木津川、西に生駒山系に連なる甘南備山が控えるなど、豊かな自然環境に恵まれたまちです。古くから交通の要衝である本市においては、一休禪師が晩年を過ごした寺として知られる酬恩庵一休寺や、令和4年11月に国史跡に指定された綴喜古墳群など、豊かな歴史が築かれてきました。

このたび調査を実施したのは、こうした本市の歴史を知る上で重要な遺跡の一つである山崎3号墳です。三山木山崎に位置する同古墳は、昭和46年に発掘調査を行っていましたが、今回の発掘調査により新たに埋葬施設の構造が明らかになりました。この成果は、京田辺市の歴史を考える上で非常に貴重な成果であります。

今回、この山崎3号墳の成果をとりまとめ、後世に残すため、調査報告書を刊行することにいたしました。発掘調査をはじめ、報告書の刊行にあたり、多くの方々にご協力・ご指導を賜りました。深く御礼申し上げます。本書が広く利用され、地域の歴史文化への理解を深める一助となれば幸いです。

今後とも、文化財の保護と普及に全力を尽くす所存でありますので、変わらぬご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

令和5年3月

京田辺市長 上村 崇

例 言

- 1 本書は令和4年度に京田辺市が実施した、京田辺市三山木山崎における山崎3号墳発掘調査報告書である。
- 2 本書の執筆および編集は、本市職員が行った。
- 3 調査を実施するについて、土地所有者およびタマホーム株式会社には多大なるご協力とご支援を賜った。ここに記して感謝の意を表します。
- 4 本書に掲載した地図は、本市発行の都市計画図である。周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲は京都府・市町村共同ポータルサイト (<http://g-kyoto.gis.pref.kyoto.lg.jp/g-kyoto/top/index.asp>) に掲載する文化財GISデータを基に作成した。国土座標・方位のないものは、上位が北である。
- 5 本書で使用している測地系は新座標（国土座標2000、平面直角座標系第VI座標系）である。
- 6 今回の調査で出土した遺物と作成した記録類は、報告書の刊行後、京田辺市で保管する。
- 7 遺構写真は本市職員が撮影した。また巻頭図版の航空写真は京都府教育庁指導部文化財保護課記念物係に依頼し撮影を行った。また出土遺物写真は、株式会社地域文化財研究所に撮影を委託した。
- 8 発掘調査および報告書の作成にあたっては、下記の機関、個人に多大なる協力を得た。記して御礼申し上げます（順不同、敬称略）。

阿部篤士、諫早直人、江崎周二郎、大賀克彦、京都府教育庁指導部文化財保護課、小池寛、小泉裕司、武本典子、田中秀弥、肥後弘幸、菱田哲郎、村田泰輔、若林邦彦

目次

1	はじめに	1
2	位置と環境	
	(1) 自然環境	2
	(2) 歴史的環境	2
3	既往の調査と経過	
	(1) 既往の調査	5
	(2) 調査の経過	6
4	測量調査	
	(1) 測量調査	6
	(2) 調査区設定	8
5	発掘調査の成果	
	(1) 基本層序	10
	(2) 遺構	10
	(3) 遺物	15
6	まとめ	18

挿図目次

第1図	山崎3号墳の位置	1
第2図	周辺の遺跡	3
第3図	調査前測量図	5
第4図	昭和46年測量図	6
第5図	墳丘測量図	7
第6図	中世遺物出土状況平面図・断面図	8
第7図	平面図	9
第8図	墳丘東西断面図	11
第9図	墳丘南北断面図	12
第10図	墓域セクション	13
第11図	粘土椀平面図・断面図	14
第12図	管玉	15
第13図	盛土内遺物1	17
第14図	盛土内遺物2	17
第15図	中近世遺物	17
第16図	墳丘復元図	19

付表目次

付表1	遺物観察表	21~22
-----	-------	-------

巻頭図版目次

山崎3号墳出土管玉
山崎3号墳周辺(西から)

図版目次

図版第1	(1)発掘調査前(北西から) (2)発掘調査前(南西から) (3)墳頂石碑(北から)
図版第2	(1)調査区全景(上が東) (2)土師器出土状況(東から) (3)中世遺物周辺断面図(北から)
図版第3	(1)粘土椀上層断面(南から) (2)墳丘検出状況(南西から) (3)墳丘検出状況(南東から)
図版第4	(1)墳丘断割状況(西から) (2)墳丘断割状況(南西から) (3)墳丘断割状況(南から)
図版第5	(1)墳丘断割状況(東から) (2)墳丘断割状況(南東から) (3)墳丘断割状況(北から)
図版第6	(1)東西調査区北側断面(南から) (2)東西調査区北側断面(南から) (3)南北調査区東側断面(西から)
図版第7	(1)南北調査区東側断面(南西から) (2)南北調査区東側断面(西から) (3)東西調査区北側断面(南から)

- 図版第8 (1) 粘土検出状況 (南から)
(2) 粘土層・墓壙検出状況 (西から)
(3) 粘土層・墓壙検出状況 (南から)

- 図版第9 (1) 粘土層・墓壙検出状況 (西から)
(2) 粘土床検出状況 (西から)
(3) 管玉出土状況 (北から)

- 図版第10 (1) 管玉出土状況 (北から)
(2) 墓壙A-A'南側断面 (東から)
(3) 墓壙A-A'北側断面 (東から)

- 図版第11 (1) 墓壙B-B'断面 (北から)
(2) 墓壙C-C'断面 (南から)
(3) 墓壙D-D'断面 (南から)

- 図版第12 (1) 作業状況

出土遺物

- 図版第13 (1) 管玉
(2) 盛土内出土遺物1

- 図版第14 (1) 盛土内出土遺物2
(2) 中近世出土遺物1

- 図版第15 (1) 中近世出土遺物2

1 はじめに

山崎古墳群は、京都府京田辺市三山木山崎に位置しており、3基の円墳から構成される古墳群である。山崎3号墳は3基のうちもっとも南側に位置しており、別名権現塚古墳とも称される。長らく国有地であり、財務省近畿財務局京都財務事務所により所有・管理されていた。昭和46年(1971)に田辺町(現京田辺市)が計画した道路建設に伴い、墳丘北側で発掘調査が実施された。調査では古墳の墳丘盛土を検出し、直径10m前後の円墳と評価されていたが、古墳の埋葬施設については確認されず、その築造年代は明らかでなかった。

令和3年度、近畿財務局により当該地の売却が実施され、山崎3号墳地内で個人住宅の建設が計画された。その後、令和4年(2022)1月に文化財保護法93条に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出され、令和4年度、京田辺市が発掘調査を実施した。

本報告は、令和4年4月26日から7月22日にかけて実施した発掘調査の成果である。なお、調査に係る費用は令和4年度国宝重要文化財等保存・活用事業補助金を利用して京田辺市が負担し、土砂除去作業及び図化作業、遺物整理作業は株式会社地域文化財研究所に委託した。

報告書の執筆は本市職員の上野が担当した。現地調査・整理作業にご協力を頂いた機関、学識経験者の方々には心から感謝を申し上げる。

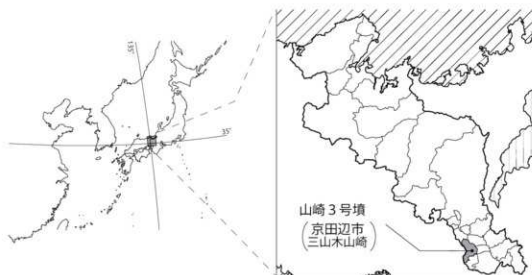
《調査組織》

調査主体 京田辺市

調査責任者 京田辺市長 上村 崇

調査指導 京都府教育委員会・京田辺市文化財保護審議会

調査担当者 京田辺市市民部文化・スポーツ振興課文化振興係 主事 上野 あさひ



第1図 山崎3号墳の位置

2 位置と環境

(1) 自然環境

京都府南部の山城地域の中心部には、南北約20km、東西5～6kmの山城盆地が存在する。山城盆地は概ね南に高く北に低い地形をなしており、盆地の南北を木津川が貫流している。京田辺市から八幡市にかけての木津川左岸地域は、西部の丘陵地と北流する木津川がつくる東部の沖積平野とで構成される。西部の丘陵は奈良と大阪を隔てる生駒山地にまで連なる。丘陵は北から八幡市域を中心とした八幡丘陵、甘南備山付近を中心とした田辺丘陵、奈良県との府県境を中心とする平城丘陵などに呼び分けられる。また丘陵地からは複数の支脈が伸びている。

京田辺市の地形と地質はおおよそ5つに区分的に分けることができる。1. 西端部の硬い基盤岩（花崗岩）からなる生駒山脈北方の山地、2. 京田辺市の霊山古生層からなる甘南備山、3. これらの山地を除く男山丘陵から田辺丘陵に続く東斜面の古期洪積層（大阪層群、大住礫層）、4. その東縁部に細長く分布する東畑・尊延寺砂泥互層、5. その東方に広がる木津川の沖積地となる平野である。西側の田辺丘陵から東へと流れる河川としては手原川や普賢寺川があげられ、いずれも木津川に流れ込む。

山崎古墳群は西からのびる田辺丘陵の東端部分に位置し、木津川へ眺望の開けた先端部分に位置している。古墳群の中では3号墳の標高がもっとも高く、約49.5mを測る。

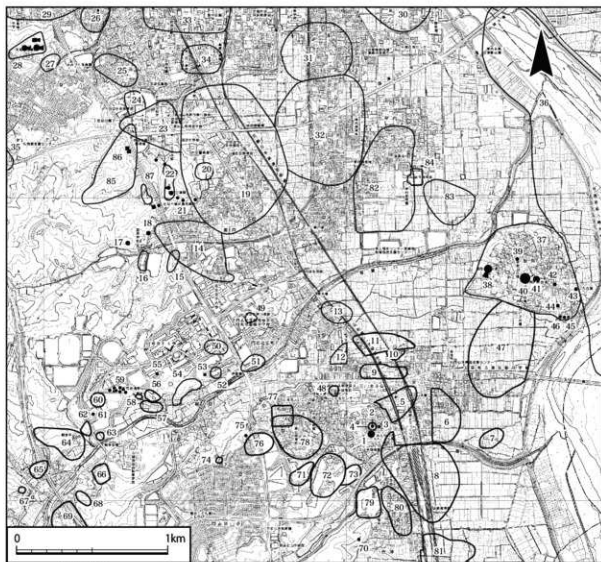
(2) 歴史的環境

山崎3号墳が位置する京田辺市の歴史的環境を概観する。

旧石器時代の遺跡としては市内南部の山間部地域に所在する高ヶ峯遺跡が知られており、サヌカイト製石核1点が出土している。縄文時代は、縄文時代中期末の薪遺跡が集落遺跡として知られており、隅丸方形の竪穴建物や土壇群などが発見されている。また、南部の三山木遺跡からは縄文時代晩期の土器類が出土しているほか、三山木遺跡の南西に位置する山崎遺跡からは、明確な遺構は検出されていないが、石棒や異形石製品が出土している。

弥生時代になると、縄文時代に比べて遺跡数が増加する。市中部からやや北寄りに位置する稲葉遺跡では、方形周溝墓が検出されており、一辺約11.5mの規模を有する。周溝から出土した土器から、時期は前期後半のものとされる。他にも、宮ノ口遺跡、宮ノ下遺跡、三山木遺跡などで前期の遺構、遺物が確認されている。弥生時代中期では田辺城下層で竪穴建物が、南垣内遺跡からは16×14mの方形周溝墓が、市南部では南山遺跡から竪穴住居が16棟確認されている。後期になると飯岡遺跡や、銅釘や鉄製品が出土した田辺天神山遺跡など、丘陵部で多く遺跡が見つかっている。

古墳時代になると、木津川流域では前期前半に椿井大塚山古墳、平尾城山古墳（ともに木津川市）が築造されるが、その後に続く首長墓はみられない。前期後半以降、京田辺市から八幡市にかけて前方後円墳や前方後方墳などが南北に細長く散在しながら分布し、古墳造営が活発化する。綴喜古墳群と呼ばれるこれらの古墳のうち首長墓とされるのは、京田辺市では大住の大住南塚古墳（前方後方墳、墳丘長71m）、同大住車塚古墳（前方後方墳、墳丘長66m）、薪に所在する天理山古墳群（1号墳：



- | | | | | |
|-------------|------------|------------|------------|------------|
| 1 山崎3号墳 | 2 山崎2号墳 | 3 山崎1号墳 | 4 山崎遺跡 | 5 三山本遺跡 |
| 6 直田遺跡 | 7 遠藤遺跡 | 8 宮ノ下遺跡 | 9 二又遺跡 | 10 東角田遺跡 |
| 11 田中東遺跡 | 12 田中西遺跡 | 13 野神遺跡 | 14 興戸宮ノ前遺跡 | 15 興戸城跡 |
| 16 川原谷遺跡 | 17 酒壺古墳 | 18 興戸宮ノ前築跡 | 19 興戸遺跡 | 20 興戸廃寺 |
| 21 興戸古墳群 | 22 興戸丘陵東遺跡 | 23 田辺遺跡 | 24 竹ノ脇遺跡 | 25 尼ヶ池遺跡 |
| 26 糟倉孫神社遺跡 | 27 小欠古墳群 | 28 天理山古墳群 | 29 新道跡 | 30 東神屋遺跡 |
| 31 鍵田遺跡 | 32 大切遺跡 | 33 稲葉遺跡 | 34 河原遺跡 | 35 茂ヶ谷遺跡 |
| 36 大将軍遺跡 | 37 飯岡遺跡 | 38 飯岡車塚古墳 | 39 弥陀山古墳 | 40 ゴロゴロ山古墳 |
| 41 薬師山古墳 | 42 飯岡東原古墳 | 43 十塚古墳 | 44 金尾山古墳 | 45 飯岡1号横穴 |
| 46 飯岡2号横穴 | 47 古屋敷遺跡 | 48 上谷浦遺跡 | 49 田辺天神山遺跡 | 50 都谷北遺跡 |
| 51 七瀬川遺跡 | 52 都谷遺跡 | 53 新宗谷築跡 | 54 新宗谷館跡 | 55 マムシ谷築跡 |
| 56 新宮前館跡 | 57 新宮社東遺跡 | 58 新宮前遺跡 | 59 下司古墳群 | 60 下司館跡 |
| 61 大御堂裏山古墳 | 62 観音寺東館跡 | 63 観音寺東遺跡 | 64 普賢寺跡 | 65 大西館跡 |
| 66 打垣内遺跡 | 67 御所内遺跡 | 68 小田垣内北遺跡 | 69 小田垣内遺跡 | 70 江津古墳 |
| 71 木原城館跡 | 72 西羅遺跡 | 73 芝山遺跡 | 74 多々羅遺跡 | 75 口駒ヶ谷古墳 |
| 76 口駒ヶ谷遺跡 | 77 南山城跡 | 78 南山遺跡 | 79 三山木廃寺 | 80 佐芽垣内遺跡 |
| 81 桑町遺跡 | 82 南垣内遺跡 | 83 宮ノ後遺跡 | 84 草路城跡 | 85 田辺城跡 |
| 86 田辺奥ノ城古墳群 | 87 興戸丘陵西遺跡 | | | |

第2図 周辺の遺跡(1/25,000)

前方後円墳 57m、3号墳:前方後円墳 81m、4号墳:前方後方墳 42m) 興戸に所在する興戸1号墳(前方後円墳、墳丘長 24m)、同2号墳(円墳、直径 28m)、同市飯岡に所在する飯岡車塚古墳(前方後円墳、墳丘長 87m)である。京田辺市内に活発に古墳が造られるのと同時に、八幡市内では石不動古墳(前方後円墳、墳丘長 88m)、茶臼山古墳(前方後方墳、墳丘長 50m)、八幡西車塚古墳(前方後円墳、墳丘長 114m)、八幡東車塚古墳(前方後円墳、墳丘長推定 90m)、ヒル塚古墳(方墳、一辺 52m)がそれぞれ築造される。これらの中でも大住南塚古墳、飯岡車塚古墳、茶臼山古墳、八幡西車塚古墳の埋葬施設には竪穴式石室が採用されるなど、古墳時代前期後半に木津川の水運に関係する首長の活発な造墓活動が推測される。古墳時代中期以降は飯岡車塚古墳が位置する飯岡丘陵で、ゴロゴロ山古墳(円墳、直径 60m)、薬師山古墳(円墳、直径 38m)、トゾカ古墳(円墳、直径 25m)が築造され、飯岡丘陵が前期から継続して古墳が造られた地域であることが窺える。

山崎3号墳が所在する三山木地区には、8基の古墳の存在が知られている。3基の古墳から構成される中山田古墳群はその実態が明らかでないが、菖蒲谷古墳・口駒ヶ谷古墳はいずれも後期古墳として知られている。山崎3号墳は山崎古墳群を構成する古墳であり、市道を挟んで北側に1号墳、2号墳が所在する。1号墳は既に消滅しているが、明治14年に発掘調査が行われ多数の勾玉が出土し、古墳時代中期の古墳と伝わる。2号墳(八王子塚)は明治20年に発掘調査され、金環や勾玉、須恵器、瓦器が出土している。埋葬施設として横穴式石室を有し、後期古墳として知られている。現在は墳頂に山崎神社が鎮座し信仰の対象となっている。境内には横穴式石室の石材が見られる。

飛鳥・奈良時代の遺跡としては、三山木廃寺や普賢寺廃寺が、生産遺跡には飛鳥時代末の須恵器窯である新宗谷窯跡や、奈良時代前期のママシ谷窯跡が造られる。また京田辺市域は古代の律令制下では山背(城)国綴喜郡に属する。市中部に位置する興戸遺跡は、東西 0.7km、南北 1kmの範囲に広がり、掘立柱建物群や土地区画に関連した遺構が見つかった。また古代寺院としては興戸遺跡と重複する興戸廃寺が存在する。

平安時代には、平安京造営の際に目印にされた甘南備山(標高 217.5m)の山頂付近に神奈備神社が祀られた。その東側の谷には『今昔物語集』にも説話がみられる神奈比寺が立地していたが、元禄2(1689)年に薪山垣外に移され、今なお信仰が続く。

中世には新遺跡で在地領主居館跡や園池の遺構を検出している。遺物は13世紀後半～14世紀前半を中心とし、多量の土師器皿とともに白磁四耳壺、青磁盤等の優品が出土している。

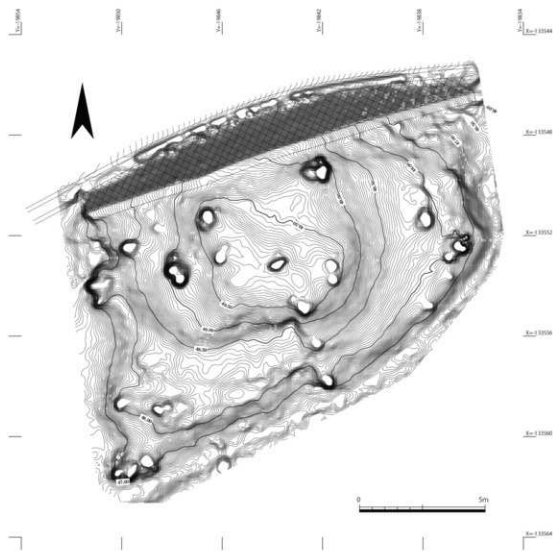
中世後半から近世にかけて南山城跡や田辺城跡が造られ、田辺城跡では15世紀から16世紀にかけての堀切や石組遺構が検出されている。

3 既往の調査と経過

(1) 既往の調査

昭和46年(1971)に田辺町(現京田辺市)が山崎3号墳の北側の一部を通る道路の建設を計画した。そのため田辺町教育委員会は同年3月に発掘調査を実施した。調査では古墳の墳丘盛土を検出し、直径10m前後の円墳と評価されている(田辺町教育委員会1981)。当時の調査では古墳の埋葬施設は確認されず、外表施設も検出していないことから、古墳の時期の特定には至らなかった。また表土付近からは灯明皿や伏見人形など、中世から近世にかけての遺物も出土し、古墳時代以降には信仰の対象とされていたと推測されている。その後、約50年間調査は行われていなかった。

今回の発掘調査前、現地には墳丘頂上に石碑が安置されていた(図版第一(3))。石碑には文字等の痕跡はみられない。石碑の前には草花を供えるプラスチック製の容器が埋め込まれていた。近隣住民によると、以前は山崎神社と合わせて山崎3号墳も参拝していたという。古墳の中では枝葉1本

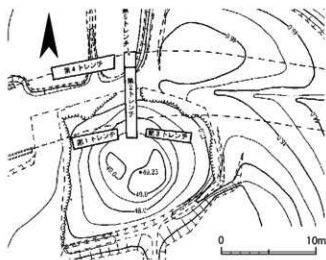


第3図 調査前測量図(1/120)

折ってはいけないと伝えられていたといい、古くから古墳に対して強い信仰があったとみられる。

(2) 調査の経過

令和4年4月26日から現場機材やプレハブの搬入、28日に掘削前の測量調査とトレンチ設定を行った。令和4年5月9日から本格的な土砂掘削を開始した。掘削・精査はすべて人力で行い、必要に応じて可能な限り木の根を切断しながら掘削を進めた。墳丘面を検出したのち再度測量を行い、墳丘内部の確認のために墳丘の断割を行った。また並行して埋葬施設の検出、掘削を進めた。その結果、山崎3号墳は古墳時代



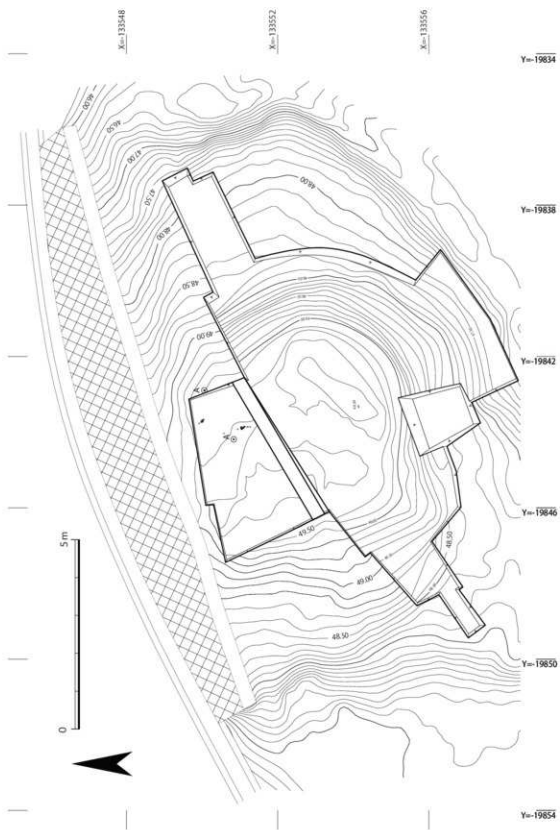
第4図 昭和46年測量図(田辺町1981)(1/400)

前期後半の直径11mの円墳であることが判明した。また埋葬施設として墓壇および粘土槨を検出した。7月20日にドローンによる空撮、翌21日に土壌サンプリングを行い、22日にすべての現地作業を終えて撤収し現場作業を完了した。なお発掘調査の終了後、即座に住宅建設の造成工事が開始されるため、現地の埋め戻しは行っていない。発掘調査終了後、8月1日から抜根および土砂掘削が実施され、9月2日から住宅建築の基礎工事が着工された。発掘終了後の工事にはすべて本市職員が立ち会った。

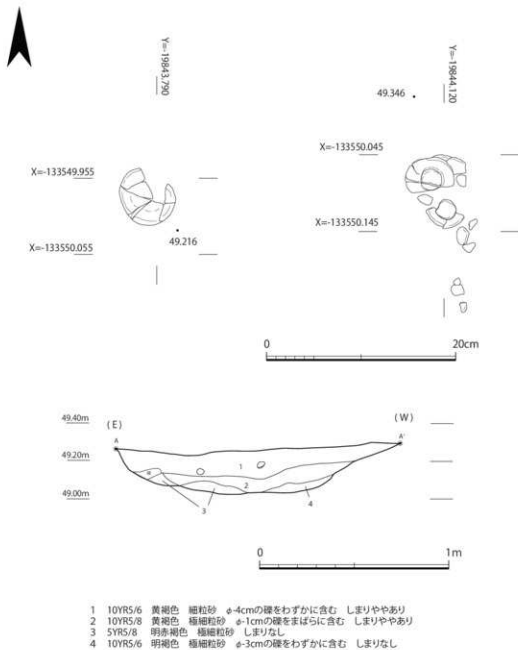
4 測量調査

(1) 測量調査

墳丘の測量は掘削開始前と墳丘面検出後の2度行った。掘削開始前は2.5cm間隔、墳丘検出時は10～20cm間隔の等高線で墳丘を図化した。墳丘は長い間高木で覆われており、地形を確認することができない状態であったが、土地の売買にあたって根本から約1mを残して伐採され、調査開始前に枝葉は残っていなかった。残された木根の直径は0.5～1mを測り、特に墳丘北西側に密集していた。図3は掘削開始前の測量図である。北側は既に道路となって墳丘は破壊されており、道路と墳丘との間はブロック塀で保護されている。墳頂は標高約49.5mを測る。墳丘北側の道路は、西から東へ降っており、墳頂との標高差は約3～5mである。また墳丘のまわり(標高47m付近)には溝状の落ち込みがみられ、墳丘裾や周濠の可能性が想定された。調査前の測量図と昭和46年の測量図(第4図)を比較すると、道路が建設された北半分の墳丘が消滅したほか、墳丘の南側から西側裾は攪乱を受けている状態であることがわかる。墳丘の他の部分は概ね昭和46年の頃と変わらない地形を保っている。



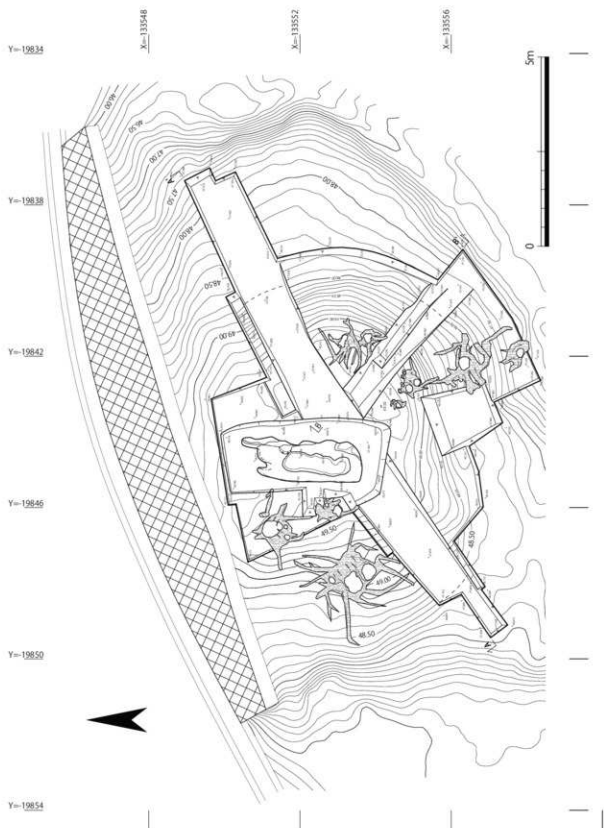
第5圖 填丘測量圖 (1 / 100)



第6図 中世遺物出土状況 平面図(1/4)・断面図(1/20)

(2) 調査区設定

表土下にはかなり根が張っていたが、抜根は遺構を損傷する可能性が予想されたため、調査前の抜根は行わず、極力根を避けながら調査区を設定した。調査区は、古墳の墳形・規模と埋葬施設の性格を明らかにすることを目的に設定した。埋葬施設については構造の手がかりが無い状態であったが、北接する山崎2号墳で横穴式石室が検出されていたため、山崎3号墳についても同様に横穴式石室の可能性を考えた。調査区は当初、墳頂からそれぞれ東側、西側、南側に設定していたが、掘削を進める過程で合体させたため、1つの調査区として報告する。また調査区の東西軸はやや北東側に振るが、



第7圖 平面圖 (1 / 100)

報告では便宜上、墳丘を南西―北東に横断する調査区を東西調査区、南東に横断する調査区を南調査区と呼称する。最終的な調査区は、東西調査区の長さが約 14.5 m、幅約 1.5m、南北調査区の長さが約 5 m、幅約 1 m を測る。また埋葬施設の検出に伴い、東西調査区から北側へ拡張しており、合計掘削面積は 53m²である。

5 発掘調査の成果

(1) 基本層序

調査地は西側から東側に向かって緩やかに下降する丘陵の先端部分に位置する。基本層序はⅠ～Ⅴ層で構成される。墳丘盛土は土質や包含する遺物・礫の量によって第Ⅲ層と第Ⅳ層の2層に分けることができる。

第Ⅰ層 現代盛土

現代の盛土層である。腐葉土の中には現代の瓦が含まれる。層厚は最大約 0.4m を測る。墳丘頂部より西側には攪乱層（第 17 層）が堆積する。墳丘西側の木根は攪乱層には入らず、攪乱層の下層（Ⅰ・18・19 層）に多量に入ることから、17 層の堆積時期は新しいものとする。

第Ⅱ層 墳丘流土・中近世遺物包含層

古墳築造後に流出した墳丘盛土および中近世遺物の包含層である。層厚は墳頂部で約 0.3m、墳丘裾付近では最大約 0.9m を測る。黄色から黄褐色の細粒砂・極細粒砂を呈し、特に墳頂部では中世から近世の遺物が含まれる。

第Ⅲ層 墳丘盛土

墓壇とその下層盛土を構成する層である。層厚は最大 1 m を測り、明黄褐色を呈するやや粘質の極細粒砂を主とする。しまりがよく、わずかであるが炭が混じる。弥生土器や剥片、円筒埴輪片を包含する。

第Ⅳ層 墳丘盛土

層厚は最大 0.4m を測り、黄～浅黄色のしまりの悪い細粒砂を主とする。Ⅲ層と同様に炭をわずかに含む。

第Ⅴ層 地山

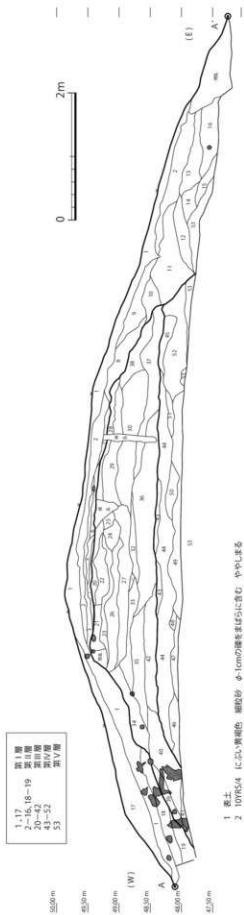
橙色～黄褐色を呈する細粒砂の地山層である。標高 47.5～48m 付近で検出した。しまりがよく粘土質の部分と、極細粒砂からなる部分がみられる。

(2) 遺構

今回の調査で検出した遺構は、墳丘盛土と埋葬施設があげられる。ここでは墳頂部で埋葬施設の検出前に認められた中近世遺物の包含層について述べた後、墳丘盛土、埋葬施設（粘土塚・墓壇）の順にまとめる。

中近世の包含層

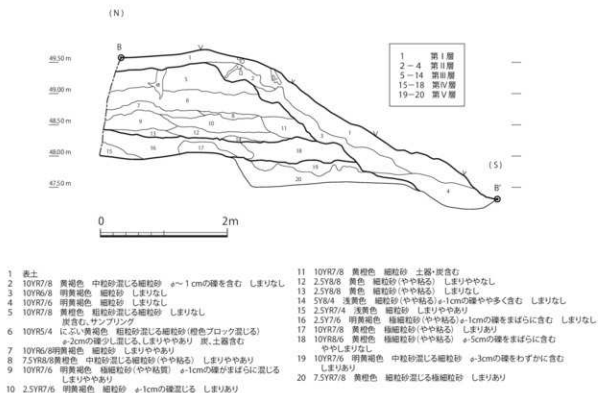
墳頂部において、中世～近世の包含層を確認した。遺構は検出していない。遺物は土師皿・灯明皿・磁器・動物形模造品が出土した。また墳頂部北側の平坦面では、ほぼ完形の土師皿をまとまった状態



- 1, 17 第I層
 2~16, 18~19 第II層
 20~42 第III層
 43~52 第IV層
 53 第V層

- 1 黄土 にごい、黄褐色 細粒砂 φ-1cmの礫をまばらに含む ややしるる
 2 10YR5/4 黄褐色 細粒砂 φ-0.2cmの礫をまばらに含む しまり度
 3 10YR5/6 黄褐色 細粒砂 やや粘り 細粒砂 φ-0.5mmの礫をわずかに含む しまり度
 4 10YR5/4 黄褐色 細粒砂 φ-0.5mmの礫をわずかに含む しまり度
 5 25YR5/6 黄褐色 細粒砂 φ-0.5mmの礫をまばらに含む しまり度
 6 25YR5/8 黄褐色 細粒砂 φ-0.5mmの礫をまばらに含む しまり度
 7 25YR7/8 黄褐色 粗粒砂少し混じる細粒砂 しまりなし 土層片含む しまり度
 8 25YR8/6 黄褐色 粗粒砂 φ-1mmの礫をやや多く含む しまりなし
 9 25Y7/6 明黄褐色 細粒砂 φ-5mmの礫をやや多く含む しまりなし
 10 25YR6 黄褐色 細粒砂 しまりなし φ-1mmの礫を少し含む しまりなし
 11 25YR8 黄褐色 粗粒砂 やや粘り 細粒砂 φ-5mmの礫をわずかに含む しまりなし
 12 25Y7/8 黄褐色 粗粒砂 やや粘り 細粒砂 しまりややあり
 13 25Y7/8 黄褐色 粗粒砂 やや粘り 細粒砂 φ-5mmの礫をわずかに含む しまりなし
 14 25Y7/8 黄褐色 粗粒砂(やや粘り) φ-1cmの礫をわずかに含む しまりなし
 15 25Y7/6 明黄褐色 中粒砂混じる細粒砂 しまりなし
 16 25Y7/4 黄褐色 細粒砂 しまりややあり
 17 黄土
 18 黄土
 19 5Y7/6 黄色 中粒砂混じる細粒砂 しまりなし
 20 7.5YR5/3 明黄褐色 細粒砂 φ-3mmの礫をまばらに含む しまり度
 21 7.5YR5/4 黄褐色 粗粒砂 φ-1cmの礫をまばらに含む しまりややあり
 22 5Y7/1 紅色 粗粒砂 しまりなし(粘土層)
 23 7.5YR5/8 明黄褐色 細粒砂 φ-1mmの礫をやや多く含む しまり度
 24 10YR5/6 黄褐色 細粒砂 やや粘り しまりなし
 25 7.5YR5/6 黄褐色 細粒砂 φ-2mmの礫をわずかに含む しまり度
 26 10YR4/6 黄色 細粒砂 φ-2cmの礫を多く含む しまり度
 27 10YR5/6 黄褐色 粗粒砂(やや粘り) φ-5mmの礫をまばらに含む しまりややあり
 28 10YR5/6 明黄褐色(褐色を少し含み) 粗粒砂 φ-5mmの礫をまばらに含む しまりなし
 29 10Y5/8 黄褐色 粗粒砂混じる細粒砂 しまりなし 灰褐色(サブソリングあり)
 30 10YR5/4 にごい、黄褐色 粗粒砂混じる細粒砂(褐色ブロック混じる) φ-2cmの礫少し混じる しまりややあり
 31 7.5YR7/6 黄色 細粒砂 しまり度よい
 32 25YR7/4 黄褐色 細粒砂 しまりややあり φ-5mmの礫を多く含む しまり度よい
 33 25YR8/6 黄褐色 粗粒砂 しまり度よい φ-1mmの礫をまばらに含む しまり度よい
 34 10YR7/8 黄色 粘り 粘り 粘り 粘り φ-5mmの礫をまばらに含む しまり度よい
 35 25YR8/6 黄褐色 粘り 粘り 粘り 粘り φ-5mmの礫をまばらに含む しまり度よい
 36 10YR7/6 明黄褐色 粘り 粘り 粘り 粘り φ-5mmの礫をまばらに含む しまりややあり
 37 10YR7/6 明黄褐色 粘り 粘り 粘り 粘り φ-5mmの礫をまばらに含む しまりややあり
 38 25Y7/3 黄褐色(褐色を混じる)中粒砂混じる細粒砂 しまりややありにあり 灰褐色
 39 10YR8/4 にごい、黄褐色 粗粒砂 しまりなし
 40 25YR8/6 黄褐色 粗粒砂(まばら) 粘り 粘り 粘り 粘り 粘り 粘り 粘り 粘り
 41 25YR8/6 黄褐色 粗粒砂(まばら) 粘り 粘り 粘り 粘り 粘り 粘り 粘り 粘り
 42 10YR7/6 明黄褐色 粗粒砂(やや粘り) φ-5mmの礫を多く含む 灰褐色
 43 25Y7/4 黄褐色 粘り 粘り 粘り(やや粘り) φ-2cmの礫を多く含む しまりなし 灰褐色
 44 25Y7/6 明黄褐色 粘り 粘り 粘り(やや粘り) φ-1cmの礫をまばらに含む しまりなし
 45 10YR8/6 黄褐色 粘り 粘り 粘り(やや粘り) しまりあり(灰褐色)
 46 25YR7/4 黄褐色 粘り 粘り 粘り(やや粘り) しまりなし
 47 25YR7/4 黄褐色 粘り 粘り 粘り(やや粘り) しまりなし
 48 25YR7/6 黄色 中粒砂混じる細粒砂 φ-5mmの礫を多く含む しまり度よい
 49 25YR7/6 黄色 粘り 粘り 粘り(やや粘り) φ-5mmの礫をまばらに含む しまりややあり 灰褐色
 50 25Y7/3 黄褐色 粘り 粘り 粘り(やや粘り) φ-5mmの礫をまばらに含む しまりなし
 51 25YR8/6 黄褐色 粘り 粘り 粘り(やや粘り) φ-3cmの礫を多く含む しまりなし
 52 10YR8/4 黄褐色 粘り 粘り 粘り(やや粘り) 粘り 粘り 粘り 粘り 粘り 粘り 粘り 粘り
 53 7.5YR8/8 黄色 粘り 粘り 粘り 粘り 粘り 粘り 粘り 粘り 粘り 粘り 粘り 粘り

第8図 填丘東西断面図(1/60)



第9図 墳丘南北断面図(1/60)

で検出した(第6図)。検出地点は標高約49.2~49.3mを測る。出土遺物は中近世のものとみられ、後世に墳丘が利用されていた可能性が考えられる。

墳丘盛土

調査区内の広範囲で墳丘盛土を検出した。墳丘南西側は攪乱を受けているが、その他は良好に遺存している。標高約47.8mで盛土と地山の境界を検出し、墳丘の裾とした。墳丘規模は直径11mで、墳形は円墳である。ただし墳裾とする箇所から外側へ、標高約47.0mまで下降した地点で地山の傾斜変換点を検出した。地山の傾斜変換点は、東西調査区の東端と南北調査区の南端で検出しており、ここが墳丘の裾となる可能性も考えられ、墳丘規模はひとまわり大きくなる可能性がある。ここでは昭和46年に墳丘北側で実施された発掘調査で検出した墳裾との整合性を考慮し、前者の規模を採用した(第16図)。

検出した盛土はもっとも高い地点で標高49.5mを測る。墳丘はほぼ盛土によって成り立つ。段築はなく、葺石・埴輪等の外装施設は認められない。墳頂部では幅約5mの平坦面を検出した。しかし墳頂部平坦面での盛土検出時に、のちに粘土床とする白色粘土を検出したため、墳頂部はかなり削平されているとみられる。墳丘斜面はなだらかではないものの、おおむね良好に遺存している。またIV層の東側は墳丘斜面の一部となるが、西側は墳丘西側斜面には至らず、上からIII層盛土を被る。

盛土は基本層序III層とIV層に分けられる。この2層には土色や土質に明らかな違いがみられる。明るい黄褐色でしまりが良いIII層と比較して、IV層はしまりが悪く、浅い黄色土を呈することから、IV層は盛土として運び込まれた土ではなく、古墳築造前からの堆積している土である可能性が考えられ

る。これらの盛土の一部（第8図36・44・49層）については、奈良文化財研究所の村田泰輔氏に土壌サンプルを採取していただいた。それについては別稿で報告したい。盛土の中には弥生土器や石器、円筒埴輪片が含まれる。また、墳丘外側に巡る落ち込みは周濠の可能性が考えられたが、周溝の中に墳丘流土が堆積していないことから、墳丘の築造より後に掘削されたとみられる。

また3号墳の北側に位置する山崎2号墳の下層では、縄文時代の遺物が出土しているが、3号墳の下層では遺構・遺物ともに確認されなかった。

埋葬施設

墳頂部において、包含層の掘削を行うと、標高49.4mで灰白色の粘質土を検出した。白色粘土は平面的にひろがり、最終的な検出長は長辺3m、短辺1.1mを測る。平面形状は短辺が丸い長方形形状を呈する。検出場所と粘土の平面形態や規模から、検出した粘土は粘土椀であると判断した。埋葬施設の検出に伴い、第10図に示すとおり8つのセクションをもうけた。

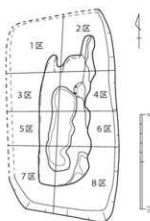
粘土椀

粘土椀は南北に主軸をもつ。粘土の厚さは最大20cmを測り、標高は粘土の北側で49.23m、南側で49.36mを測る。南側の短辺（7・8区）の検出粘土は丸みを帯びているが、北側（1・2区）不整形であり、粘土の東西の端が北へ飛び出るように検出している。粘土の西辺はほぼ直線的に遺存しているが、東辺は全体的に形が乱れる。1・2区では粘土の一部が北側に細長く伸び、特に2区においては粘土が下方へぶら下がるような状態で検出した（第11図B-B'断面）。粘土の中には管玉（図12-2）が含まれていた。4区では、検出粘土の上面から約30cmにおよぶ落ち込みが確認できる。当初検出した時点では、粘土を被覆粘土とみていたが、粘土が極端に薄く、また東辺においては著しく不整形であることから、木棺や被覆粘土は既に消滅しており、検出した粘土は粘土床であると位置付けた。

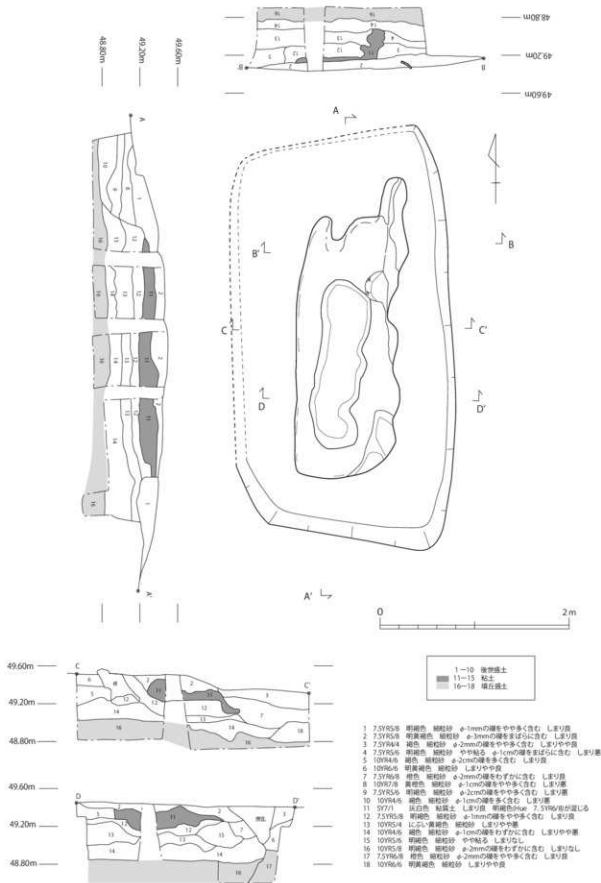
粘土椀の中央には長辺1.8m、短辺0.5mの縦長の窪みがみられる（第11図）。この窪みは、おそらく木棺が設置されていたことでできた窪みとみられる。木棺や木質は残存していないが、窪みの断面形状から、設置されていた木棺は割竹形木棺と推測される。

墓壇

粘土椀を精査する中で、墓壇の一部を検出した。標高は49.2mを測る。墓壇は南側においては遺存するが、その他は遺存状態が悪い。墓壇西側は木根が多量に入っていたため、抜根を検討したが、抜根によって残存している墓壇や粘土椀を破壊してしまう恐れがあったため、抜根せず可能な範囲で根を切断しながら掘削を進めた。そのため、西側肩のほとんどは平面検出が叶わず、墓壇西肩は墳丘の東西を断削した際の断面から復元した。また墓壇北側は攪乱によって既にほとんど失われていたため、検出した墓壇東肩との屈曲部分から北側を復元した。墓壇東側は粘土床検出面では確認できず、



第10図 墓壇セクション（1/80）



第11図 粘土椀平面図・断面図 (1/40)

墓壇埋土を掘削したのち、標高約 48.9m で検出した。

墓壇は粘土礫をほぼ中央に据える位置に検出した。平面形状は検出部分では隅丸長方形を呈する。検出時の墓壇上面の規模は、長辺 4.5m、南端幅 2.3m、深さは最大 60cm を測る。墳丘の主軸に直交してほぼ南北に長軸をもつ。墓壇の壁はほぼ垂直に立ち上がるため、墓壇上面と底面の規模はほとんど同じである。墓壇は地山から約 1.4m の盛土をしたのち、盛土を掘削して成形する。築造当時の墓壇上面レベルは不明であるが、遺存している箇所では粘土床検出上面から約 30cm 掘り込んで造られる。また墓壇底において、外側へのびる排水施設や礫は設置されていない。

墓壇から出土した遺物としては、2区から古墳の副葬品と考えられる管玉 1 点（第 12 図 - 1）と 4 区から瓦質のすり鉢（第 15 図 - 15）が挙げられる。墓壇の埋土には明らかに中世以降の遺物を含んでおり、攪乱にあった際に粉れたものと考えられる。

（3）遺物

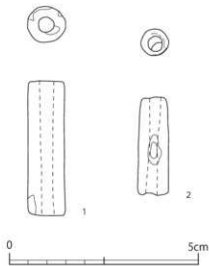
調査ではコンテナ 3 箱分の遺物が出土した。出土遺物は管玉、弥生土器、石器、円筒埴輪、土師皿、灯明皿、羽釜、摺鉢、陶磁器、動物形模造品、瓦である。出土遺物の大半は、表土に含まれていた現代の瓦片であり、平瓦が多くを占める。ここでは埋葬施設に伴う遺物、墳丘盛土に伴う遺物、包含層に伴う遺物に分けて述べる。

埋葬施設に伴う遺物（第 12 図）

1・2 は緑色凝灰岩製の管玉である。1 は墓壇直上の攪乱土から出土した完形品で、全長 3.5cm、直径 1.0cm、孔径 0.4cm、重さ 3.5g を測る。2 は粘土礫北東の攪乱粘土中（第 9 図 2 区）から出土した。全長 2.6cm、直径 0.8cm、孔径 0.5cm、重さ 2.0g を測る。側面の中心に欠損部分があり、下側の端面から穿孔した時に割れたものとみられる。1・2 ともに、側面と端面は研磨により平滑に仕上げられており、研磨工程前の製作痕跡は確認されない。1 は穿孔の端面が鋭いの比べ 2 は鈍く、使用工具の差があると想定される⁽¹⁾。製作時期は大賀氏による緑色凝灰岩製管玉の法量分析から、領域 F に該当し、前期後半に位置付けられる（大賀 2010）。

墳丘盛土に伴う遺物（第 13・14 図）

3～12 は、墳丘盛土から出土した。3～7 は弥生土器、8 は円筒埴輪、9～12 は石器である。弥生土器は胎土が粗く、焼成は良好である。3 は壺の口縁部付近である。口縁端部は欠損している。器面は剝離している部分が目立つが、ヨコナデによって調整される。残存長は 1.9cm を測る。近江系の搬入土器とみられ、弥生時代後期頃のものと思われる。4 は壺の底部である。底部径は 11cm を測る。外面はヨコナデによって調整される。にぶい黄褐色を呈する。5 は壺の頸部片である。残存長は 2.6cm を測る。内外面ともに浅黄褐色を呈する。6 は壺または甕の底部であり、底部径は 7.5cm



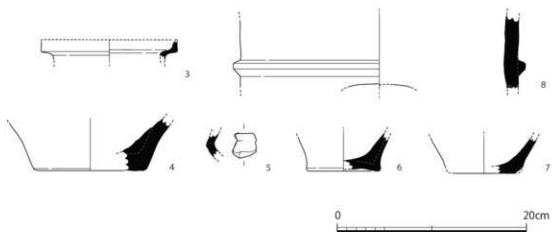
第 12 図 管玉（1 / 1）

を測る。内外面はナデ調整、底部はユビオサエにより調整する。内外面ともに褐色を呈し、生駒西麓産とみられる。7は壺または甕の底部である。4～7の弥生土器は、弥生時代中期頃のものともみられる。8は円筒埴輪である。埴丘東西断割トレンチの第40層から出土した。残存長は7.6cmを測る。下方に透孔の端面がみられる。胎土は密、焼成は良好である。器面調整は摩滅により不明であり、時期の特定はできない。9～12はサヌカイト製の剥片である。9は長辺2.1cm、短辺1.5cm、厚さ0.3cmを測る。先端部分を欠く。10は長辺2.4cm、短辺1.7cm、厚さ0.5cm、重さ1gを測る。11は長辺3.7cm、短辺3.5cm、厚さ0.6cm、重さ7gを測る。12は長辺6.2cm、短辺3.5cm、厚さ1cm、重さ18gを測る。

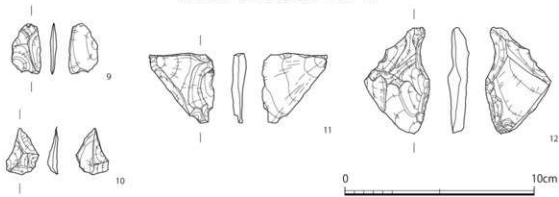
包含層に伴う遺物（第15図）

埴頂部直下の包含層から墓壇埋土にかけて、中世～近世にかけての遺物が出土した。13は羽釜である。鈔から下方には煤が付着する。残存高は4.4cmである。14・15は摺鉢である。14は2個体の破片であるが、調整や胎土、焼成等の特徴から同一個体であると判断したため、合成して復元した。器高は9cmに復元できる。器壁は施軸を施す。底部は露胎である。15は瓦質摺鉢の底部である。墓壇埋土（4区）から出土した。残存長は2.7cm、底径は9.1cmを測る。外面はナデで調整される。胎土は粗く、焼成は良好である。16・17は磁器の碗である。ともに草花文染付を施す。16は器高5cm、底径4.2cm、口径は11.2cmを測る。内面を蛇目状に軸刺ぎする。17は器高4.7cm、底径3.2cm、口径は8.2cmを測る。18は完形の磁器酒環である。器高3.9cm、底径3.8cm、口径は7.2cmを測る。19～21は粘土椀の上層からまとまって出土した土師皿である。底部と胴部の境目は1mm程度の窪みがみられる。外面は底部をユビオサエとヨコナデ、内側はヨコナデとハケメで調整される。胎土は密、焼成は良好で、にぶい橙色を呈する。24は土師皿である。埴頂から出土した完形品である。器高は2.1cm、口縁部径は9.1cmを測る。内外面をユビオサエ、口縁部をヨコナデで調整する。22、23、25、26は灯明皿であり、後円部に煤が付着する。22は器高1.2cm、口径7.1cmを測る。23は器高1.5cm、口径8.7cmを測る。25は器高2cm、口径9.1cmを測る。26は器高1.8cm、口径9.5cmを測る。鎌倉時代のもと考えられる。19～21の土師皿は、灯明皿と比較して小ぶりである。27は動物形模造品である。埴頂から出土した。残存長は3.9cm、幅は3.5cm、厚さは0.8～1.3cmを測る。胎土は密、焼成は良好である。全体をナデで調整する。狐の胴部と脚の接合部分とみられる。

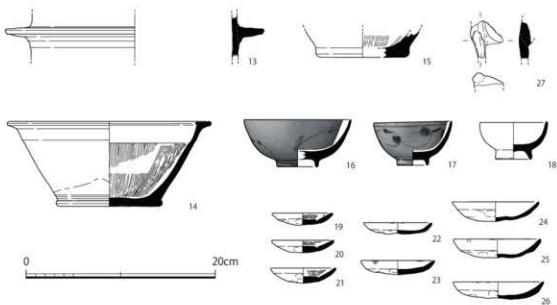
⁽¹⁾奈良女子大学大賀克彦氏にご教示を得た。



第13図 盛土内遺物1 (1/4)



第14図 盛土内遺物2 (1/2)



第15図 中近世遺物 (1/4)

6 まとめ

今回の調査で得られた山崎3号墳の成果を以下にまとめる。

発掘調査の結果、山崎3号墳は直径11mの円墳であることが分かった。墳丘は盛土によって造られ、外表施設は有さない。埋葬施設を1基検出したが、その大半は既に消滅していた。以下、埋葬施設と墳丘盛土について所見を加える。

埋葬施設の削平について

墳丘中央で墓壙と粘土槨を検出したが、粘土槨は粘土床部分の検出にとどまり、被覆粘土や木棺は確認することができなかった。粘土床に不整形な部分があること、副葬品とみられる管玉が粘土の中やその上層から出土していること、墓壙の中には中世の土器が含まれていることから、粘土床より上層は既に削平されていると考えられる。粘土床の上には本来被覆粘土が認められるはずであるが、その痕跡は一切無く、粘土床の上層の土中に粘土が混入することもなかった。

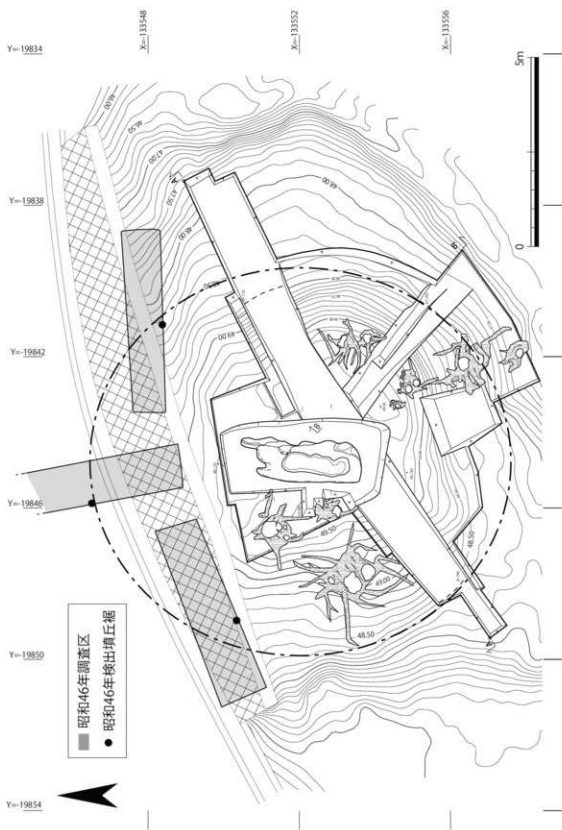
粘土槨の削平は、被覆粘土部分が粘土ごときれいになくなった状態であり、盗掘による削平と考えられるが、その後石碑の建立などでさらに手を加えられたとみられる。

墳丘盛土について

盛土内には弥生土器や剥片、円筒埴輪片が確認された。山崎古墳群では弥生土器は発見されておらず、土は外から持ち込まれた可能性が高い。山崎3号墳から西へ320mの地点には南山遺跡が所在する。南山遺跡は弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡を検出しており、弥生時代中期まで遡るとされる（京田辺市教育委員会2010）。山崎3号墳の墳丘盛土に含まれている土器と年代が一致するため、土砂搬入の候補地のひとつとしてあげられよう。また3号墳から北東へ約150mの地点には、弥生時代の集落が確認されている三山木遺跡があり、弥生時代の集落としては前期中頃に成立し中期初頭にかけて展開した（田代 弘・岡崎研一2000）。このように山崎3号墳の周辺には弥生時代の集落遺跡が点在しており、古墳の盛土は周辺から採取された可能性が高い。盛土の中に含まれていた円筒埴輪についてはその時期が確定できなかったが、周辺に埴輪を有する古墳は現在のところ確認されていないことから、未確認の古墳が存在する可能性も考えられる。

山崎古墳群の位置付け

山崎3号墳は出土した管玉から古墳時代前期後半と位置付けた。山崎3号墳の北側には、3号墳と同様に円墳とされている山崎1号墳と2号墳が所在する。1号墳は古墳時代中期、2号墳は古墳時代後期と位置付けられている（田辺郷土史会1959）。今回の調査成果により3号墳が前期の古墳とするならば、山崎古墳群は古墳時代前期から後期にかけて継続して古墳が築かれた可能性が考えられる。古墳時代を通して同一の場所で古墳が造られ続けるのは市内では珍しく、注目できる。山崎3号墳の資料は、市内における古墳時代を考えるにあたり重要な位置を占めるが、特に市内南部の地域においては調査が進んでおらず未解明な部分も多いため、今後適切な保護をはかるためにも引き続き調査を進める必要がある。



第16図 墳丘復元図(1/100)

【参考文献】

- 梅原未治 1923「第十 三山木村山崎ノ石棒と同地の古墳」『京都府史蹟勝地調査会』第4集
- 大阪大学文学部国史研究室 1964「第三章 富田林真名井古墳」『河内における古墳の調査』
- 大阪大学文学研究科考古学研究室 2011「長尾山古墳第6次・第7次発掘調査概報」
- 大賀克彦 2010「4. 東大寺山古墳出土玉類の考古学的評価—半島系管玉の出土を中心に—」『東大寺山古墳の研究』
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号、日本考古学会
- 京田辺市教育委員会 2010『南山遺跡発掘調査報告書—三山木越前地内宅地造成に伴う発掘調査—』
京田辺市埋蔵文化財調査報告書第38集
- 京田辺市教育委員会 2014『三山木遺跡第6次発掘調査報告書—集合住宅建設に伴う発掘調査—』
京田辺市埋蔵文化財調査報告書第41集
- 神戸市教育委員会 2008『白水瓢塚古墳発掘調査報告書』
- 田代 弘・岡崎研一 2000「5. 三山木遺跡第2次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第92冊
- 田辺町 1968『京都府田辺町史』
- 田辺郷土史会 1959『田辺町郷土史』古代篇
- 田辺町教育委員会 1981「4. 権現塚古墳発掘調査概報」『田辺町埋蔵文化財調査報告書』田辺町埋蔵文化財調査報告書第2集
- 中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

付表1 遺物観察表

番号	出土位置	種類	器種 部位、残存度	法量【cm、残 存・復元は〇】	調整	胎土	色調	焼成	備考
1	粘土棟北側	玉	管玉 完形	長：3.6 幅：1.0 重：3.5g	両面穿孔	—	—	—	—
2	2区 粘土内	玉	管玉 完形	長：2.6 幅：0.8 重：2.0g	両面穿孔	—	—	—	—
3	粘土棟南アゼ	弥生土器	壺 口縁部 1/6	口径：— 器高：(1.9) 底径：—	内：ヨコナデ、割離のため不明 外：ヨコナデ、割離のため不明	粗	内：10YR8/2 灰白色 外：10YR8/2 灰白色	良	—
4	南トレンチ (Ⅲ層)	弥生土器	壺 底部 1/6	口径：— 器高：(5.5) 底径：(11.0)	内：割離のため不明 外：ナデ、摩滅のため不明	粗	内：10YR7/4 にぶい黄褐色 外：7.5YR5/6 明褐色	良	—
5	粘土棟上層 南北アゼ内	弥生土器	壺 頸部	口径：— 器高：(2.6) 底径：—	内：ナデ 外：ナデ	粗	内：10YR8/4 浅黄褐色 外：10YR8/4 浅黄褐色	良	—
6	2区 墓壇埋土	弥生土器	壺又は甕 底部 1/2	口径：— 器高：(4.0) 底径：(7.5)	内：ナデ 外：ナデ、指オサエ	粗	内：7.5YR4/3 褐色 外：7.5YR4/3 褐色	良	生駒西鏡産
7	墳頂部 粘土棟上部 盛土	弥生土器	壺又は甕 底部 1/3	口径：— 器高：(3.7) 底径：—	内：ナデ 外：ナデ、割離のため不明	粗	内：10YR6/4 にぶい黄褐色 外：10YR4/2 灰黄褐色	良	—
8	東西 tr 盛土 (Ⅳ層)	埴輪	円筒埴輪 胴部 1/12	口径：— 器高：(7.6) 底径：—	内：摩滅のため不明 外：摩滅のため不明、ヨコナデ	密	内：10YR7/4 にぶい黄褐色 外：7.5YR7/4 にぶい褐色	良	透孔 (1孔)
9	6区 粘土下層	打製石器	剥片	長：2.1 幅：1.5 重：1.0g	—	—	—	—	サヌカイト
10	東西 tr 盛土 (Ⅲ層)	打製石器	剥片	長：2.4 幅：1.7 重：1.0g	—	—	—	—	サヌカイト
11	東西 tr 盛土 (Ⅳ層)	打製石器	剥片	長：3.7 幅：3.5 重：7.0g	—	—	—	—	サヌカイト
12	南北 tr 盛土 (Ⅲ層)	打製石器	剥片	長：(6.2) 幅：(3.5) 重：18.0g	—	—	—	—	両面調整 サヌカイト
13	東西 tr (Ⅱ層)	瓦質土器	羽釜 胴部 1/12	口径：— 器高：(4.4) 底径：—	内：摩滅のため不明 外：ヨコナデ	粗	内：2.5Y7/2 灰黄色 外：N4/0 灰色	良	—
14	表採	陶器	すり鉢 1/6	口径：(21.1) 器高：(9.0) 底径：(10.6)	内：施釉、すり目 (9本/1.4cm) 外：施釉、露胎、回転ナデ	密	内：7.5YR4/2 灰褐色 外：7.5YR4/2 灰褐色	良	—
15	4区 墓壇埋土	瓦質土器	すり鉢 底部 1/6	口径：— 器高：(2.7) 底径：(9.1)	内：すり目 (9本/2.3cm) 外：ナデ	粗	内：5Y5/1 灰色 外：5Y5/1 灰色	良	—
16	表土	磁器	碗 1/2	口径：(11.2) 器高：5.0 底径：(4.2)	内：施釉、蛇ノ目軸刺ぎ 外：施釉、染付 (草花文・團縁)、露胎	緻密	内：10GY8/1 明緑灰色 外：10GY8/1 明緑灰色	良	—

付表1 遺物観察表

番号	出土位置	種類	器種 部位、残存度	法量【cm.残存・ 復元は0】	調整	胎土	色調	焼成	備考
17	表土	磁器	碗 1/2	口径：8.2 器高：4.7 底径：3.2	内：施軸 外：施軸、染付(草花文・ 團線)、露胎、砂目	緻密	内：2.5GY8/1 灰 白色 外：2.5GY8/1 灰 白色	良	
18	表土	磁器	酒杯 完形	口径：7.2 器高：3.9 底径：3.8	内：施軸 外：施軸、露胎	緻密	内：2.5Y7/1 明オ リーブ灰色 外：2.5Y7/1 明オ リーブ灰色	良	
19	墳頂拡張部 II層 (落込み)	土師器	皿 ほぼ完形	口径：6.2 器高：1.3 底径：—	内：ヨコナデ、ハケメ、 ナデ 外：ヨコナデ、指オサ エ	密	内：7.5YR6/4 に ぶい・橙色 外：7.5YR6/4 に ぶい・橙色	良	
20	墳頂拡張部 II層 (落込み)	土師器	皿 1/3	口径：6.5 器高：1.3 底径：—	内：ヨコナデ、ハケメ、 ナデ 外：ヨコナデ、指オサ エ	密	内：7.5YR6/4 に ぶい・橙色 外：7.5YR6/4 に ぶい・橙色	良	
21	墳頂拡張部 II層 (落込み)	土師器	皿 1/2	口径：6.9 器高：1.6 底径：—	内：ヨコナデ、ハケメ、 ナデ 外：ヨコナデ、指オサ エ	密	内：7.5YR6/4 に ぶい・橙色 外：7.5YR6/4 に ぶい・橙色	良	
22	墳頂拡張部 II層 (落込み)	土師器	皿(灯明皿) 4/5	口径：7.1 器高：1.2 底径：—	内：ヨコナデ、ナデ 外：ヨコナデ、指オサ エ	密	内：7.5YR7/6 橙 色 外：7.5YR6/6 橙 色	良	口縁端部に 煤付着
23	墳丘北西部 表土	土師器	皿(灯明皿) 2/3	口径：8.7 器高：1.5 底径：—	内：ヨコナデ、ナデ上 げ 外：ヨコナデ、指オサ エ	密	内：10YR7/4 にぶ い・黄橙色 外：10YR7/4 にぶ い・黄橙色	良	口縁端部に 煤付着
24	墳頂	土師器	皿 完形	口径：9.1 器高：2.1 底径：—	内：ヨコナデ、指オサ エ 外：ヨコナデ、指オサ エ	密	内：7.5YR6/6 橙 色 外：7.5YR6/6 橙 色	良	
25	墳頂	土師器	皿(灯明皿) 1/3	口径：(9.1) 器高：2.0 底径：—	内：ヨコナデ、指オサ エ 外：ヨコナデ、指オサ エ	密	内：10YR6/4 にぶ い・黄橙色 外：10YR6/4 にぶ い・黄橙色	良	口縁端部に 煤付着
26	墳丘北西部 表土	土師器	皿(灯明皿) 完形	口径：9.5 器高：1.8 底径：—	内：ヨコナデ、ナデ上 げ 外：ヨコナデ、指オサ エ	密	内：10YR7/4 にぶ い・黄橙色 外：10YR7/4 にぶ い・黄橙色	良	口縁端部に 煤付着
27	墳頂	土製品	動物模造品	長：(3.9) 幅：(3.5) 厚：0.8-1.3	内：ナデ 外：ナデ	密	内：— 外：7.5YR6/4 に ぶい・橙色	良	

圖 版



(1) 発掘調査前（北西から）



(2) 発掘調査前（南西から）



(3) 墳頂石碑（北から）



(1) 調査区全景（上が東）



(2) 土師器出土状況
（東から）



(3) SX01 断面（北から）

(1) 粘土礫土層断面
(南から)

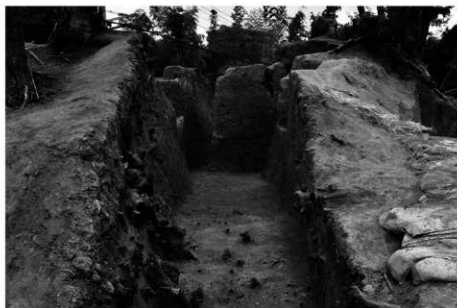


(2) 墳丘検出状況
(南西から)



(3) 墳丘検出状況
(南東から)





(1) 墳丘断削状況
(西から)



(2) 墳丘断削状況
(南西から)



(3) 墳丘断削状況
(南から)

(1) 墳丘断面状況（東から）



(2) 墳丘断面状況
（南東から）

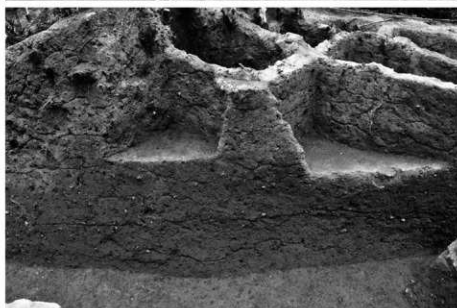


(3) 墳丘断面状況（北から）





(1) 墳丘北側断面（南から）



(2) 墳丘北側断面（南から）



(3) 墳丘東側断面（西から）



(1) 墳丘東側断面
(南西から)



(2) 墳丘東側断面 (西から)



(3) 墳丘北側断面
(南から)



(1) 粘土検出状況（南から）



(2) 粘土塚・墓壇
検出状況（西から）



(3) 粘土塚・墓壇
検出状況（南から）



(1) 粘土罎・墓壇
検出状況（西から）



(2) 粘土床検出状況
（西から）



(3) 管玉出土状況
（北から）



(1) 管玉出土状況
(北から)



(2) 墓壇 A-A' 南側断面
(東から)



(3) 墓壇 A-A' 北側断面
(東から)

(1) 墓壇 B-B' 断面
(北から)



(2) 墓壇 C-C' 断面
(南から)



(3) 墓壇 D-D' 断面
(南から)





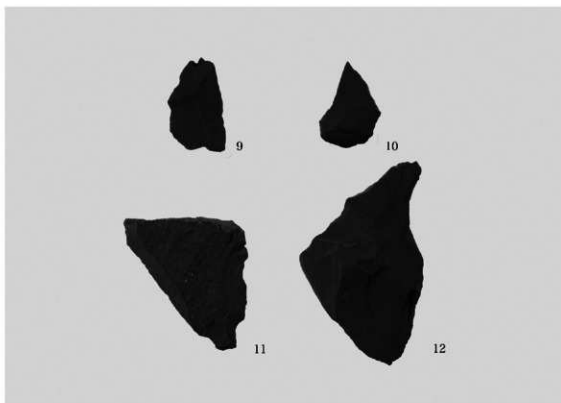
(1) 作業状況



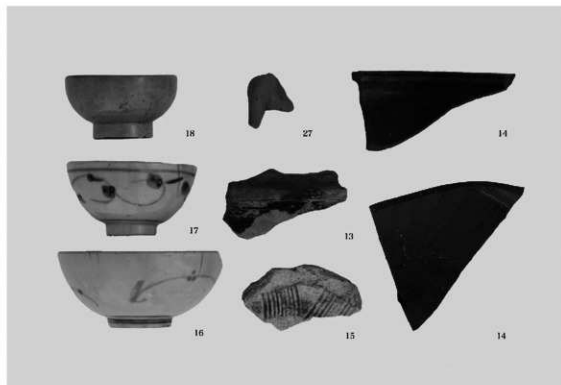
(1) 管玉



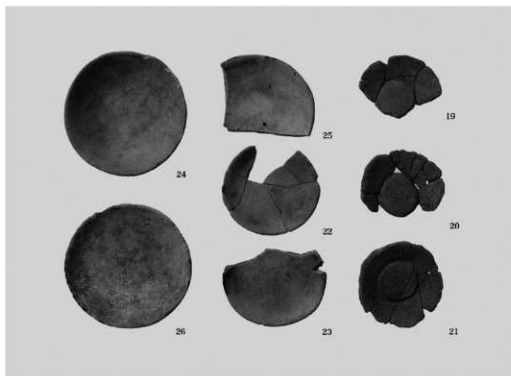
(2) 盛土内出土遺物 1



(1) 盛土内出土遺物 2



(2) 中世以降出土遺物 1



(1) 中世以降出土遺物 2

報告書抄録

図 名	山崎3号墳発掘調査報告書—個人住宅建設に伴う発掘調査—							
副 書 名	京田辺市埋蔵文化財調査報告書							
巻 次	第48集							
シ リ ー ズ 名								
シ リ ー ズ 番 号								
編 著 者 名	上野あさひ							
編 集 機 関	京田辺市							
所 在 地	〒610-0393 京都府京田辺市田辺80 0774-64-1300							
発 行 年 月 日	西暦 2023年3月31日							
所 取 道 跡 名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	道跡番号					
山崎3号墳	京都府京田辺市 三山木山崎	26211	54	34° 47' 45"	135° 46' 59"	20220426 ～20220722	58.186	個人住宅建設
所 取 道 跡 名	種 類	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
山崎3号墳	古墳	古墳時代前期	墓壇・粘土椽・墳丘盛土		菅玉・弥生土器・石器・円筒埴輪・土師器・陶磁器・動物形埴造品・瓦		円墳1基の発掘調査	
要 約	<p>山崎3号墳は、京田辺市三山木山崎に所在する古墳であり、昭和46年に道路建設に伴い田辺町（現京田辺市）により発掘調査が行われた。盛上で造られた直径約10mの円墳と評価されたが、埋葬施設や時期は明らかではなかった。令和4年、個人住宅建設計画に伴い発掘調査を実施した。</p> <p>調査の結果、埋葬施設に粘土椽を有する直径11mの円墳であることが明らかになった。</p>							

山崎3号墳発掘調査報告書

発行 令和5年3月31日

編集 京田辺市市民部
文化・スポーツ振興課

発行 京 田 辺 市
〒610-0393 京都府京田辺市田辺80

印刷 三星商事印刷株式会社
〒602-8358 京都府京都市上京区七本松通

下長者町下る三番町 273 番

